

## 長谷川さんの話

■次の文章は、車椅子で生活する長谷川さんが、小さい頃からの自分のことを語ったお話の一部です。

私は、もの心がついて、家から外に出て、家族以外の人や周りの子どもたちを見るようになってから自分の体が他の人たちと違うので、何か変だなと思い始めました。自分の足が自分の思い通りに動かなかったんです。そのためにいらいらしたり、「私はいつになったら歩けるようになるの？」と両親に聞いたりして、両親を苦しめることもよくありました。乳母車うはぐるまで出かけると周りの人からジロジロ見られたり、笑われたりしたので人の視線がとても気になりました。だから外に出ることはほとんどなくて、時間があつたら腰までの装具(※)そうぐをつけて、『私も周りのみんなと同じように歩いたり走ったりしたい！』という気持ちで、歩く練習をしていました。

保育園に入園してすぐの四歳の誕生日に、両親から車椅子くるまいすのプレゼントをもらいました。乳母車が車椅子に変わっても、外に出ると周りの人の視線は乳母車の時と変わらないので、その車椅子に乗ることはほとんどありませんでした。でも保育園では、同じ組の子どもたちが、私の障害を気にしないで普通に接してくれたので気が楽になって、保育園の友だちや近所の友だちと車椅子に乗って遊んでいました。友だちと遊ぶのはとても楽しかったので、『これからもずっとみんなと一緒に遊んだりしたいな』と思い始めました。

しかし、小学校へは、みんなと別れて養護学校に入学することになりました。入学して間もない頃は、友だちと離れ離れになって、「どうして私はここにいるんだろう？どうしてここにいななくちやいけないんだろう？」といつも疑問に思っていました。ちょうどその頃、母親から、「あなたは障害をもっているんだから、周りの人よりも何倍も何十倍も努力しなければいけないよ。」

「あの子にはできるのに、なんであんなにはできないの？」  
ということを言われて、自分に自信がなくなって、みんなのいる地域にもどつていく勇気がわきませんでした。

でも、反対に悔しい気持ちきもちが小学校の間に少しずつ出てきて、母親からまた同じことを言われぬように、歩く訓練や勉強を毎日一生懸命しました。そうやって、いつも苦しい顔を見せずに弱音をはかないでがんばり、常に笑顔を絶やさぬように心がけてきました。そうしたら、悲しいとか苦しいとかの弱みを他の人に見せないようにまですまっただけです。

だけど、心のどこかで『この状況を少しでも変えたい』という気持ちもあって、小学六年生の時に思い切って「地域の中学に入学したい」という自分の思いを両親に打ち明けました。両親にこのことを話すのには、とても勇気が必要でした。今まで、あまり自分の思いを伝えることをしてこなかった私が、初めて真剣に面と向かって訴えたんです。それから、両親やたくさんの方の応援があり、一年以上かかって修学旅行に行かないという条件で中学転校が実現しました。

中学一年の三学期の半ばなかに、やっとのことで転入し、『さあ〜これか

楽しい生活が始まるぞ!』とわくわくしながら、中学校に通い始めました。だけど、学校という所はそう甘くはありませんでした。一年生の時は、新しい生活や学校に慣れるのに精一杯で、学校生活を楽しむ余裕がありませんでした。

学校生活に慣れてきても、いじめられたり、嫌味いやみを言われたりすることがあったので、悔しい思いをすることが続きました。でも、だからといってそれが理由で学校を休んだり、やめたいと思ったことは一度もありませんでした。それに、その悔しさを誰かに相談したりすることも決してしませんでした。どうしてかという、たくさんの人の協力のおかげで希望がなくなったので、『ここで弱音を吐くわけにはいかない』と強く思ったし、両親にも心配をかけたくなかったからです。

そんな苦しい時期もありましたが、みんなと一緒に生活するうちに楽しいことも少しずつ増えてきました。三年生の時には、クラスの友だちが、私が修学旅行に行けない事について話し合ってくれました。私はその時に、中学校に入るときのことをみんなに話しました。みんなは、「そんなのおかしい!」と言ってくれました。そして先生も一緒になって校長先生にお願いしてくれたので、私はみんなと修学旅行に行くことができました。その時のクラスメートのみんなや先生には、今でも本当に感謝しています。

中学校を卒業する頃でも、私は他の人に自分の弱いところを見せることができませんでした。今、こんなふうに自分の小さい頃の話や、自分の障害のことを人前で話せるようになったのは、高校二年生の時の、あのクラスメートとの出会いがあったからなんです。

急な教室移動などで車椅子を押してくれる人がいなくて私が困っているときに、その人はいつもさりげなく声をかけてきてサポートしてくれました。その彼に、私が、

「ごめんね。」

と言うと、きまって彼に

「ごめんねじゃなくて、ありがとうだろ!」

と怒られました。

その頃の私は、友だちに優しくしてもらうたびに、『私はみんなの迷惑になっているんじゃないかな?重荷になっているんじゃないかな?』と感じていたので、いつも人に気をつかっている、人からの親切にも身構えていたんだと思います。そんな私に彼は、

「べつに障害があってもいいじゃん!持ち物の一つ、個性の一つぐらいに思えば・・・人間は、誰だって一人で生きていくことはできないんだから。それは障害があっても無くても同じこと。おまえにできないことがある。俺にもできないことがある。もちろん、おまえにしかできないこともあるし、俺にしかできないこともある。一緒にいる時はお互いを尊重し、お互いに足らないところは補い合い助け合いながら、プライベートの時はお互い自分のやりたいことをして、一度きりしかない人生、お互いに悔いの残らないよう精一杯生きていこうぜ!」と軽く言うてくれました。

私は肩の力が一気に抜けて、不思議なくらい気持ちになりました。

(※) 装具……歩行を補助するために身体に装着する用具

## 長谷川さんの話（小学校高学年）

### A 教材設定の理由

子どもたちの中には、これまでに障害者と一度も会ったことがなかったり、接することがなかった人がいることだろう。また、たとえ見たことがあったり、話しかけたことがあった子どもたちであっても、一緒に生活したり身近にいない限り、障害者がどんな気持ちで生活をしているのか、どんなことを考えているかよくわからないと予想される。

そんな子どもたちが、長谷川さんが語る小さい頃からの生活や、その時々の中に思いに触れることにより、障害のある人も、自分たちと同じように考えたり悩んだりすることを感じ、障害者との距離が縮むことを意図している。

また、この教材には次のような意図もある。

『当たり前前に生きるには、まず当たり前前の人間にならなければならない。』と考える人がいる。この『当たり前前』の概念が、差別されている人を追い込んでいくことがある。当たり前前のラインから遠いとされる人は、とにかく何事もがんばらなければいけなくなる。そのがんばる姿は同情をさそう。反面、がんばらない姿は努力が足りないとして、差別することの理由を正当化してしまう場合がある。

たとえば、障害のある人は、他人に迷惑をかけないように、障害を克服するまで努力し、がんばり続けなければならないということになってしまう。つまり他人との関係の中で、周りに迷惑をかけているのではないかと悩み、努力し続けなければならない状況に追い込まれていくのである。そしてこのようにがんばらせてしまう側とがんばらなくてはならない側をつくるのが差別につながる。その点で、障害者の置かれている位置は厳しい。

さらに、この教材を障害者に対する差別の問題とだけ考えず、本当の自分を出すことができないで苦しんでいる（がんばらなければならない状況におかれてしまっている）子の問題として広げていきたい。

そのような視点を持って授業に臨んで欲しい。

### B 教材の解説

本教材は、長谷川幸子さんが、全同教会の場で「私の歩んできた道」というタイトルで報告されたレポートを中心に構成されている。長谷川さんは、自分の歩みをレポート報告だけではなく、白山市内の小学校で語られている。話の冒頭で、長谷川さんはこう述べる。

【身体障害者の一人として生きてきた私の人生の中で、欠かすことのできない財産、起点になったことが二つあります。一つ目は養護学校から地域の学校に移ったこと（地域に戻ってきたこと）、二つ目は高校2年生の時のクラスメートの一人が私に言ってくれた言葉です。その言葉によって自信と勇気をもらい、結果的に母親との関係を新たに築き直す ことにつながりました。】

長谷川幸子さんは、障害をもって生まれた自分が、高校生までがんばり続けた様子を、親との関係や自分の学校生活を中心に語っている。一緒に遊んでいた保育園の友だちと離れ離れになって養護学校に通い出したときのこと。その自分を「がんばれ！がんばれ！」と励まし続けた母親のこと。母親の言葉を納得しないまま、がんばる障害者を演じ続けた自分のこと。養護学校から地域の中学校に転入するときに、七十万円近くする階段昇降機を自分で購入すること、修学旅行には行かないことが条件にあったこと。地域の中学校に入学するまでに一年以上もの月日がかかったことなどが語られている。本教

材は高校生の場面で終わっているが、実際の報告は高校卒業後の様子や、母との関係を築き直したときに続いていく。

子どもたちには、決して同情だけではなく、「何でそこまでがんばるのか？」という矛盾を感じさせたり、クラスの中で友だちと「うまく」付き合っていくために、他人の目を気にしたり、迷惑をかけないように気を遣いながら生きていく自分と重ね合わせて読んで欲しい。

ひたすらがんばり続けていた長谷川さんが、いろいろなことを我慢してきたそれまでの自分を見つめ直し、自分の障害を受け入れ、自分の思いでいろんなことにチャレンジしていくきっかけになったのが、高校生のときに会う一人の生徒である。

彼の言った「ごめんねじゃなくて、ありがとうだろ？」やそれに続く言葉は、がんばる長谷川さんに対して、『そんなにがんばらなくてもいい』という意味と、『ありのままでもいい』ということを伝えている。なぜ長谷川さんが肩の力が抜けて、自分の人生を心から楽しめるようになったのが彼の言葉の中に具体的に描かれている。高校生のときに「肩の力を抜いて生きる」ことに気付いた長谷川さんは、

【それ以来、自分の気持ちに素直に生きていけるようになりました。そして、自分の障害というものを受け入れ、自分の思いでいろいろな事にチャレンジできるようなり、自分の人生を心から楽しめるようになりました。】  
と述べている。

高校卒業前には母親の反対を押し切り、車の免許を取り、高校を卒業後は金沢にある語学系の専門学校に通い、専門学校在学中の夏休みにアメリカ・シアトルへの短期留学にチャレンジした。

高校卒業後初めて母親に、養護学校時代に言われた言葉(教材文の中の母

親の言葉)について聞いた場面がある。母親は、小学校の就学時健診の際に、今のままじゃ地域に受け入れられない。なるべく人様に迷惑をかけないようにしなければならぬと思ひ、娘を苦しめることになることはわかっていただけ、その時は自分で言い聞かせてがんばらせようと思ったと語る。長谷川さんは母親からの「本当にごめんね。」という言葉から、母親も苦しんでいたことを知り、驚くとともに母の言葉を本当に嬉しく思う。

高校卒業後の長谷川さんの人生については、児童の「長谷川さんはその後、どうなったの?」という質問に答える際に参考にされたい。

### C 教材の使用にあたって

①実際にクラスの中でつらい思いをしている児童、とくに自分をなかなかみんなの前で出しきれず、無理をして学校生活をおくっている児童がいれば、その児童の思いを引き出し、クラス全体で考えていけるように、授業のとりくみを展開してほしい。

②授業の中で、「障害者はがんばらなければならない」という思いを持つ児童がいることも予想されるが、教職員は「本当にそうなのか」と問い返しながら授業を展開してほしい。

### D 参考資料

・第五十五回全国人権・同和教育研究大会報告

「私の歩んできた道」 長谷川幸子

E 授業の展開例

授業の展開と基本発問

学習内容と支援

1 導入

① 障害のある人（障害者）と会ったことがありますか。  
また、話を聞いたことがありますか？

① 一人ひとりに自分の体験をふり返らせる。どんな出会いであったか。どんな話を聞いたか、自由に話を出させたい。

2 展開

② 「長谷川さんの話」を読みましょう。

② 教材文を読ませ、長谷川幸子さんが自分の生い立ちから高校生の途中までの生活や思いを、自分で書いた文章であることを補足説明する。

③ 養護学校に行った長谷川さんは、『どうしてここにいるんだろう』という疑問に思っていました。そのことについてあなたはどお思いますか？

③ 保育園の時に一緒に遊んでいた友だちと離れ離れになったつらさや、『これからもずっと一緒にいよう』と思っていたのに、みんなと違うところにいる不安に気づかせたい。

④ 高校生のときに車椅子を押してサポートしてくれる彼に、長谷川さんは、なぜ「ごめんね」と言ったのでしょうか？

④ 養護学校時代にお母さんから「障害を持っているから人よりも努力しなければならぬ。」と言われたことや、養護学校から地域の中学校への転校にはたくさんの人の協力があつたこと、いじめや嫌がらせがあつても、『弱音を吐くわけにはいかない』と強く思ったことが原因で、他の人に弱さを見せられなくなつたことや、自分のがんばりが足りなくて、他人に迷惑をかけているんじゃないかと不安に感じていたからなどの理由に気づかせたい。

⑤ 高校生のときに肩の力が一気に抜けて、不思議なくらい気持ち楽になつたのはなぜですか？

⑤ みんなの迷惑になつて、重荷になつていて感づいていた長谷川さんが、一人のクラスメートの言葉がきっかけになつて、もう無理に頑張らなくてもいいことに気づき、楽になつていく時の気持ちの変化を考える。

3 まとめ

⑥ 長谷川さんのお話を読んで、思ったこと・感じたことを書きましょう。また、このお話と今の自分とつながることがあれば書きましょう。

⑥ 長谷川さんの話を聞いて、障害者も健常者も同じように悩んだりすることに気づかせたい。また、子どもの思いを知る手がかりとしたい。